

令和7年度 学校自己評価システムシート（大妻嵐山中学校・高等学校）

達成度 A ほぼ達成（8割以上）・B概ね達成（6割以上）・C変化の兆し（4割以上）・D不十分（4割未満）

目指す 学校像	○建学の精神「学芸を修めて人類のために」を実現する学校 地域との連携の下で、学校社会貢献活動を推進する社会的価値を目指す学校 ○学祖大妻コタカ先生の教育理念に基づき、人格の陶冶を目指す学校 校訓「恥を知れ」の下で、自らを厳しく律し、自立した女性を育成する学校	求める生徒像 アドミショナルリッ	①自らを学問的・人間的に鍛え、己の使命を果たし人類に貢献する女性 ②自らを厳しく律し、広い教養を備え、他を思いやる共感力と高い志を持つ女性	重点目標 グランド・ユエーションリッ	①未来を生き抜く「探究する力」を育成する ②未来を生き抜く「表現する力」を育成する ③未来を生き抜く「感じる力」を育成する ④未来を生き抜く「自ら学ぶ力」を育成する
------------	--	---------------------	--	-----------------------	---

番	現状と課題	目標	具体的方策	達成度	達成状況及び次年度への課題
I 入 試 広 報	①中学入試について 昨年度に比べ、出願者数は減少（777名→673名）したものの、入学者は増加し、55名（目標達成度92%）となった。入学者60名という目標達成のため、さらなる工夫、改善が必要である。 ②高校入試について 昨年度に比べ、出願者数はほぼ横ばい（140名→142名）であるが、入学者が減少し、内部進学者と合わせ103名（目標達成度69%）となった。内部進学者数の確保とともに、高校入学者数の増加のため、さらなる工夫、改善が必要である。	①中学入試 ・入学者数：60名 ・学校説明会等への参加者数：170名 ・まなびカエキスパート入試出願者数：80名 ②高校入試 ・入学者数：150名 ・高校選択セミナー参加者数：350組 ・学校説明会等への参加者数：500名 ・単願受験者数：100名、併願受験者数：100名	①まなびカエキスパート入試の個別面談参加者、受験者の増加 ①英語を活用した入試等、新たな入試方法の導入 ②外部会場でのセミナー開催のさらなる充実 ②大妻女子大学、他大学との高大連携のさらなる充実（大妻女子大学オンデマンド講義への参加、高大連携協定の推進等） ②地域密着型・個別指導型等の塾との協体制のさらなる強化 ②大妻嵐山中学校生徒の高校内部進学率向上 ①②校内イベントの内容充実とイベント参加者、来校者の増加 ①②ホームページ、SNS等の活用による情報発信のさらなる強化	B	・第一志望入試のまなびカエキスパート入試ではあるが、個別面談、受験者ともに減少した。 ・大妻英語入試を新規実施した。入学者増加に結び付くように次年度に向けて改善していく。 ・6会場で高校選択セミナーを開催した。参加生徒数は毎年増加し、本校の知名度向上に有効である。 ・大妻オンデマンド講義は初年度として順調にスタートした。また、新たに県内私立大学と連携協定に向けて折衝を開始した。連携の内容についても詰めていきたい。 ・塾対象説明会を実施したが、本校の取組についてさらに深く理解していただく工夫が必要である。 ・内部進学率は低下した。部活動の在り方を含め抜本的な検討が必要である。 ・新規のオープンスクール（7月、8月）では100のコーナーを設け、全校を挙げての催事とした。次年度は、個別相談会を同時開催するなど、さらに改善していく。 ・ホームページの更新頻度を高める必要がある。SNSによる情報発信は順調にスタートした。
II 進 路・ 学 習 指 導	①生徒の進路希望を実現させる取り組みを継続する。 R6年度卒業生は名古屋大、お茶の水女子大等の国公立大に7名、早慶上理・GMARCHに16名、大妻女子大に31名、薬学系大学に7名、看護医療系大学に6名が合格するなど、多くの生徒の進路希望の実現を達成している。 ②キャリア教育のさらなる充実と強化が課題である。 ③進路希望実現に対応できる学力等の向上が必要である。 ④国際理解教育「大妻グローバル」、科学的思考力を育む「大妻サイエンス」のさらなる強化が求められる。	①進路希望の実現 （国公立7名、早慶上理ICU5名、医歯薬5名、GMARCH15名、大妻女子大50名等） ②コースの特色を活かしたキャリア学習展開 ③将来の在り方を考えるキャリア教育の推進 ③授業及び課外活動を通じた学力の向上 ④国際理解教育の推進とその基盤となる英語コミュニケーション力の向上 ④科学的探究プロセス（課題発見→仮説設定・情報収集・実験→考察・整理→表現・発表）習得	①②「高大連携プログラム」。大妻女子大、東京理科大、埼玉医大、女子栄養大等による連続出張講義を課外活動として実施（新規）。 ②「キャリア教育プログラム」。様々な職業の外部講師による連続講演を課外活動として実施（新規）。 ①②「m_r tokyo Girls」大妻女子大学と連携したPBL（課題解決学習）。 ①②「総合進学サポートプログラム」。総合型選抜や公募推薦等の対策として志望理由書、小論文、面接に関する講師による連続講義。 ①③「特進SS縦割り合宿」。ハイクラス勉強合宿。 ①③「サマー、ウインターゼミ」。長期休業中における授業型補習。 ②③「嵐山個別塾」。卒業生メンターによる自習サポート、進路相談。 ④英語劇、英語プレゼン、海外研修、海外修学旅行、英検対策。 ④オオムラサキ飼育と観察（中学）、みつばちプロジェクト（高校）	A	・「高大連携プログラム」として、8大学から講師を招き連続出張講義を実施し、希望生徒延べ231名が参加した。次年度は講義分野を計画的に配置したい。 ・「キャリア教育プログラム」では、弁護士、起業家、教育関連企業の方を招き連続講義を実施した。 ・「m_r tokyo Girls」は、新たに生徒を募集し5月の商品販売に向けて活動を始めた。 ・「総合進学サポートプログラム」は、コースの特性に合わせて実施した。次年度も継続する。 ・「特進合宿」は、昨年度よりも講座内容を拡充しつつ、保護者負担の費用を若干抑制できた。 ・長期休業の授業型補習は、予定通り実施した。 ・「嵐山個別塾」は、現時点で延べ112名の卒業生により61回実施した。生徒参加数は昨年比2.3倍となり、高校生の進路相談、中学生の自習補助として定着しつつある。 ・英語劇、英語プレゼンは順調に準備が進行中。海外研修、海外修学旅行は予定通り実施。英検はこれまで以上に1次対策補習を計画的に実施した。 ・みつばちプロジェクトは、韓国研修への参加やラバンダー苑との協働など活動がさらに充実した。
III 生 徒 指 導	①「大妻の精神で、上質な学校生活」を継続的に推進することが求められる。 ②単なる満足度ではなく、学校に対するエンゲージメント（「深い関係性や関わり」School Engagement 学校に対する愛着、愛校心）をより一層高める必要がある。 ③活性化しつつある生徒会活動及び部活動において、さらなる高みを目指すことが課題である。	①礼法、道徳教育の充実 ②学校行事等を通じた「本校生であることの誇り」「大妻に学ぶプライド」の伸長 ③生徒会活動のさらなる活性化、部活動による人格形成と強化部を中心とした活動実績の向上	①外部講師による「論語講座」「礼法指導」「着付け教室」「箏曲指導」。定期的な論語の素読。 ①外部講師による「コミュニケーションマナーアップ講座」、本校スクールカウンセラーによる「ソーシャルスキルアップ講座」（新規）。 ②③目標に向かって協力することを学び、達成感を共有する体育祭、大妻祭（入場者目標3,000名） ②③生徒会と協力した卒業式「式歌」制定、各階ワークスペースの活用。 ③授業及び部活動等の教育環境整備としての体育館空調設備の完備	A	・学校評価アンケートの結果、学校生活満足度は、中学生90.5%（保護者84.9%）、高校生93.6%（保護者96.2%）。School Engagementを示す指標はどの項目も上昇し、ほぼ90%。 ・これまでの礼法指導、道徳教育を予定通り実施するとともに、マナーアップ講座、ソーシャルスキルアップ講座を立ち上げ、良好な人間関係を構築するスキルを向上させることができた。 ・体育祭では「本気になること」の素晴らしさを体感した。大妻祭の入場者は、目標には届かなかったものの昨年度比11%増加した（2276名）。 ・「式歌」を『You Raise Me Up』とし、生徒自身が日本語訳をつけ、練習を重ねた。 ・体育館空調設置が完了し、効果的に活用している。 ・強化部である中学バレー部が全国3位、ダンス部が県代表として全国出場など高い実績を上げた。
IV 社 会 貢 献	①単なる地域連携ではなく、「学校社会貢献活動 SSR=School Social Responsibility」として学校資源を地域社会に還元する。 ②上記により、「社会に貢献できる自立した女性」を育み、人間力（ヒューマンスキル）の向上を図る必要がある。	①地域連携体制のさらなる整備、拡充 ②社会貢献事業への参加生徒の増加	①②「大妻嵐山チャレンジ『ボランティア』プログラム」 ・嵐山町ハイスクール議会 ・嵐山町社会福祉協議会「夏休みボランティア体験プログラム」 ・嵐山史跡の博物館「高校生ボランティア」 ・嵐山町生涯学習課「らんざん子ども大学」 ・埼玉県立小川げんきプラザ「イベント手伝いボランティア」	A	・嵐山町ハイスクール議会が2年目となり一般質問や意見書の内容がより深化する等、ボランティア活動が定着した。「大妻嵐山チャレンジ『ボランティア』プログラム」以外のボランティア活動にも積極的に参加する生徒が増え、地域連携が進展するとともに、「社会でできる力」を育むことができた。 ・次年度以降、活動の成果を活かして進路希望を実現する仕組みを構築したい。